

夏祭の裏方

夏を彩るお祭を陰から支える人たち



みこし 神輿の担ぎ手 【伊邦会】

華やかな神輿は「祭の華」であり、当別のあゆみが息づき、伝統を守るために、粋な男性が集まりました。

伊邦会（会長 宮永雅己さんほか 60名）は昭和63年に商工会、青年会議所、農協の青年部などが中心になって結成されました。7年前に本神輿の修復を機に夜の神輿（夜間渡御）も行うようになり、大きく祭を盛り上げています。総重量で600kgもの神輿を担ぐには体力のほか作法やリズムなどが必要で、これまで「江別みこし会（江神会）」からも指導も受け、今年は6月から毎週のように練習を重ねてきました。

この日は約30人が集まり、神妙な面持ちで神輿が動かないように飾り網を結わい付けていました。

盆踊り 太鼓の練習 【商工会青年部】

「北海盆踊」と「こども盆踊」、この音色と太鼓の音が何よりも夏の風情を盛り立てます。太鼓のたたき手は商工会青年部（部長 並川憲多さんほか 12名）で、今年も7月から練習が始まっています。「太鼓は体力勝負！手のひらはテープを巻いていますが、マメでポロポロです。一番大変なのは、音の関係で窓を閉め切った暑い商工会館会議室での練習です。これを乗り越えてはじめて一人前」と汗だくでの練習でした。

当別神社の「例大祭」のほか、「☀️さん・産・フェスタ」や幼稚園などシーズンで5箇所での演奏があります。



お盆休みといわれるとおり、お盆は先祖の霊を供養するため、全国的に休暇が認められ、多くの方がこの時期に当別町にも戻ってきます。

盆踊りの会場で旧知の友人、親戚などとお会いするというのもよくあることです。お盆のちょうどこの時期、当別神社の例大祭も

同時に行われています。

当別神社は伊達邦直主従がシブに上陸した明治4年(1871年)に小さな祠を建てたことに始まります。当別に移住して社殿を造営、当初は阿曾山神社と呼び、8月15日を例大祭の日と決めました。そもそも全く性質の違う全

国的なお盆と地元神社のお祭が重なることで、当別のお祭は大変賑やかな行事となっています。

当別の夏祭には様々な人々が関わっています。ここに紹介した4団体は、昔からの伝統、文化を伝承するものと、行灯のような新しい取り組みへの挑戦もありますが、

短い夏にかけるそれぞれの想い

行灯の作成 【当別あんどん粋^{いき}】

夜の神輿とともに「閻魔大王^{えんま}」「地獄の鬼」と「協賛者PR」の3基の行灯が夜の街を練り歩きました。

当別あんどん粋（代表 前泰治^{まえやすはる}さんほか 12名）の皆さんが3ヶ月かけて制作したもので、高さも4mほどありますが、細部まで表現され職人技というべき堂々としたものです。この会は、行灯のお祭を当別で実現したいという思いの仲間が集まり、6年前から制作を始めました。江差町の「姥神（うばがみ）大神宮渡御祭」や沼田町の「夜高あんどん祭」のように町中のみんなが制作するようなお祭になったら楽しいと前さんはいいます。



灯籠流し 【全久寺】

パンケチュベシナイ川には今年も先祖の霊を供養する灯籠流しが行われました。河川改修により昭和50年頃から中断されていましたが、平成2年に復活してから20回目となりました。

今年名前の書かれた灯籠は全部で450個。「先祖に対しての想いがお盆に詰まっております、伝統的な灯籠流しを復活させるために土地改良区や土木現業所に何度もかけ合い、認めてもらいました。」と住職の白井應隆^{しらいおうりゅう}さん。北海盆歌が流れる中、伊達橋の下流から幸橋の下流まで約100mをそよそよと一筋の帯となって弔いの光が流れていきました。

いずれの団体も短い夏のお祭を盛り上げ、あるいは忘れてはならないものを心に刻もうと様々な方が活躍しているのです。

8月15日はくしくも終戦記念日とも重なります。多くの方の冥福を祈るがごとく、この日、建設協会による当別町140年花

火大会が、夜空を彩りました。今年の夏は、例年に無く暑い日々が続きましたが、短い夏の盛大なお祭は、今後も残していきたいこのまちの大切な風物詩のひとつです。

